

- 1 大場磐雄博士写真資料の概要

大場磐雄博士写真資料は、ガラス乾板・硝酸セルロースフィルム・35mm ネガフィルム等からなる主として博士が撮影した原版資料である。これまでに、ガラス乾板3,960点・硝酸セルロースフィルム313点、三酢酸アセテートフィルム3点の計4,277点について画像およびメモ書のデジタル化を終え、本書に添付した「大場磐雄博士写真資料データベース」を作成した。なお、この他に整理途上の資料として35mm ネガフィルム322本、別置されていたガラス乾板約820点がある⁽¹⁾。

写真資料の内容

データベースに収録した項目は、画像データ、資料番号、グループ名、撮影対象、撮影場所、撮影年代、時代、メモ書(箱)、メモ書(包紙)、原板種類、原板サイズ、文献、備考の13項目であり、画像データおよびメモ書(箱)～原板サイズの5項目が資料オリジナルの情報、それ以外は今回の整理によって付与したものである。後者についてはメモ書および関連文献に基づいているものの、全てを網羅しえたものではない。漏れも多いと思われるが、検索の目安として作成したものである。

前述したように必ずしも完全なものとは言えないが、今回作成したデータベースをもとに写真資料の特徴を簡単にまとめておきたい。なお、原板以外のデータは今後も修正を行なっていく予定であり、今回は概数を提示するに留めたい。

資料は、個々の遺跡・神社あるいは1回の調査旅行ごとにまとまっており、今回の整理ではこれを「グループ」として扱った。家族・知人等のポートレートや記念写真の類約400点は一括して人物写真としたため最も多いグループになっているが、これを除くと長野県平出遺跡関係400点を筆頭に、神宮調査関係140点、茨城県大生古墳関係120点、羽黒鏡、東京都亀塚古墳、神社境内林関係、静岡県登呂遺跡、長野県上原遺跡、東京都伊興遺跡各100～80点、長野県浅間古墳群・茨城県鏡塚古墳各50点、埼玉県猪山遺跡、新潟県千種遺跡、秋田県大湯環状列石各30点などをつづく。

次いで、撮影場所であるが、長野県700点が最も多く、三重県、東京都、静岡県、茨城県、千葉県、奈良県、神奈川県、群馬県、山形県、埼玉県と続く。長野県は現地調査の数も多く考古学関係の資料が殆どである。三重県は伊勢神宮関係、静岡県は伊豆地方の神社と祭祀遺跡、奈良県は神社関係、東京都・茨城県・千葉県・神奈川県は大正期からの遺物写真も多いが、まとまったものとしては古墳時代関係が多い。山形県は殆どが羽黒鏡である。一方、北海道、青森県、富山県、長崎県、鳥取県、徳島県、高知県、沖縄県の資料はみられない(表1)。

撮影年代については大正11(1923)年から亡くなる前年の昭和49(1974)年までみられる。大正11年は神奈川県立横浜第二中学校の教師となった翌年であり、國學院大學卒業直後から利用していることが伺える。その後大正14(1925)年に内務省に入るが、この間、年間30～70点程度を撮影している。その後、学部講師となった昭和10(1935)年には年間100点を超え、昭和12年～14年には年間200点程度を撮影している。この多くは各地の神社調査の際に撮影されたものである。戦後はやや減るものの、大学教授に昇格した昭和24(1949)年以降は再び年間100点を超え、平出遺跡・上原遺跡・亀塚古墳などの調査が行われた昭和26年には年間500点を撮影している。ガラス乾板の使用は大正11年(1923)～昭和38(1963)年と長期的であるのに対し、硝酸セルロースフィルムは大正11年、昭和13(1938)年～昭和17年、26年、32年と短期的・断続的である。整理途上の35mmフィルムは昭和32(1957)年～昭和48(1973)年のものが残っている。今回扱った使用のうち昭和49年の資料は他者から提供された3点の三酢酸アセテートフィルムのみであり、昭和30年代にガラス乾板から段階的に35mmフィルム

に切り替えたようである⁽²⁾。

原板の種類およびサイズについてはガラス乾板3,960点(手札版が3,141点、キャビネ版が655点、6×9版が149点等)、硝酸セルロースフィルム313点(6×6版233点、4×5版58点、8×10版58点等)、三酢酸アセテートフィルム3点(4×5版カラー)である。これらの使い分けについては別途検討したいが、キャビネ版は点数の多いグループに多く、大規模な調査に使われたものと位置づけられそうである。

(中村耕作)

整理の方法

乾板等の資料は、既に博士自身あるいは弟子によっておおむね年代順に、小箱および大箱に整理されていた。今回の整理は、基本的にその順番に従って一連の資料番号を付与している。これらは従来の箱から取り出し、60枚を一箱に収め、箱の蓋にはシリカゲルを備えている。35mmフィルムは専用のファイルに、その他の資料類は箱のまま保管している。

まずクリーニングと整理番号割り振りを行なう。整理番号はガラス乾板・硝酸セルロースフィルムについては一連の番号を付している。次に、透過原稿スキャナで取り込み、画像の明るさや陰影の補正等を行ない保存する。解像度1000dpi、保存形式はJPEGである。保存先はDVDライブラリを採用してきたが、現在ではさらに万全を期すために外付けハードディスク2個をバックアップとして利用している。

画像処理作業自体はこれに留まるが、併行して以前保管されていた様々な包み紙に残された“メモ書き”を読み起こすことで資料のテキストデータ化作業を行なっている。本作業においては複数方向からのクロスチェックとして大場資料の確実性が増すため単に“メモ書き”を読み起こすに留まらず、『楽石雑筆』『神道考古学論攷』『祭祀遺蹟』『神道考古学講座』といった大場氏の著作や年譜、各種報告書などから事実確認、撮影日時・場所・資料の特定といった補足作業も進めた⁽³⁾。テキストデータは、稲生典太郎氏・小出義治氏ら大場氏を直接知る方々の協力を得ながらノートに書き起こし、そこから項目を選択し、エクセルを用いてデジタルデータ化する。なお、35mmフィルムについては、複写および“メモ書き”の読み起こしは終了しているが、それらのデジタルデータ化については未着手である⁽⁴⁾。

(荒井裕介)

註

- 1) 菅生遺跡関係約580点、昭和28年代の資料(大生古墳群、大室古墳、児玉石神事、伏見稲荷、大門峠・雨境峠)約100点、栃倉遺物関係約40点、砧緑地内古墳関係、忌部玉造関係、北高森古墳関係、福井関係など。
- 2) この昭和30年代以降の正式な調査写真については大場氏自ら撮影・保管することなく、小出義治氏や杉山林継氏などが保管してきた。従って、35mmフィルムは大場氏の個人的な資料と位置づけられそうであるが、未発表資料も少なからずあり、今後の整理を期したい。
- 3) 『楽石雑筆』等は大いに利用したが、一方で文字や日付が食い違っている資料や、該当する記載がない資料も少なからず見受けられた。そうした点で、大場博士の足跡あるいは学史を探る上での本写真資料、大場磐雄博士資料、および未整理の草稿・カード・私信類を含む本資料群の価値は高い。
- 4) 本節は荒井裕介「学術フロンティア作業報告 - 大場磐雄資料編」『國學院大學学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究』第1集の一部をもとに加筆したものである。

地 域	概数	内 容
長 野 県	730	平出遺跡、上原遺跡、秋宮経塚、柴宮銅鐸、伊那地方
三 重 県	330	伊勢神宮関係、柚井貝塚、大山田貝塚、名張地方
東 京 都	330	亀塚古墳、伊興遺跡、井萩遺跡、大田区周辺
静 岡 県	270	登呂遺跡、伊豆関係（見高遺跡、吉佐美遺跡、三島大社、伊豆山等）
茨 城 県	250	大生古墳群、常陸鏡塚、鹿島神宮
千 葉 県	190	安房神社洞窟、粟島台遺跡、九十九坊廃寺、富岡村古墳、二子塚古墳
奈 良 県	170	三輪山、檀原遺跡、鳥見霊時、唐古遺跡、諸神社
神奈川県	160	加瀬山古墳、相模国府祭、登尾山古墳、横浜市周辺、茅ヶ崎～伊勢原周辺
群 馬 県	160	桐生賀茂神社、姥石、櫃石、埴輪
山 形 県	140	羽黒鏡、酒田周辺、寒河江
埼 玉 県	130	猪山遺跡、西別府遺跡、美里村祭祀遺跡、埼玉古墳群
福 島 県	60	棚倉・建鉾山、阿武隈考古館、後作田古墳
岐 阜 県	60	那比新宮社、多岐神社、飛騨地方
京 都 府	60	神社境内林（貴船、北野、賀茂ほか）
愛 知 県	50	砥鹿神社・本宮山、北設楽郡
新 潟 県	50	千種遺跡、糸魚川周辺
福 岡 県	40	大宰府付近、宗像神社、宮地嶽
山 梨 県	40	日下部遺跡、諸古墳
愛 媛 県	40	大洲周辺
栃 木 県	40	二荒山、二荒山神社
秋 田 県	30	大湯環状列石
兵 庫 県	30	各社磐座
滋 賀 県	30	日吉大社
鹿 児 島 県	30	鹿児島神宮
宮 崎 県	30	宮崎徴古館
大 分 県	30	宇佐神宮
山 口 県	20	遺物類
島 根 県	20	出雲地方の神社等
大 阪 府	20	誉田神社
岡 山 県	10	吉備路周辺
香川県、佐賀県、和歌山県、岩手県、宮城県、広島県、熊本県、福井県：10点以下 分類不可・不明等：680点		

表1 都道府県別主要撮影対象（数値は概数 撮影対象は概ね10点以上のもの）